

警眼社社主田山宗堯とは誰ぞ(六訂稿)

—『警察協会雑誌』との関連をめぐって— —明治警察史の一齣—

- HP 初載:
- ・平成 20(2008)年 9 月 30 日初稿作成
 - ・平成 20 年 11 月 15 日改訂稿作成
(『警察協会雑誌』印刷者の件を補正するとともに、誤植等の訂正をした。)
 - ・平成 20(2008)年 11 月 23 日二訂稿作成
(「(お断り) 頑鉄生(後藤狂夫)「警察界に不可忘田山宗堯氏」によせて」を載せるとともに、『警察協会雑誌』印刷者の件を更に補正した。)
 - ・平成 20(2008)年 12 月 28 日三訂稿作成
(全体にわたって二、三補正した。)
 - ・平成 22(2010)年 8 月17 日(火)四訂稿作成
(「後藤狂夫」及び「金沢求也」につき補足した。)
 - ・平成 22(2010)年 9 月 15 日(水)五訂稿作成
(「田山宗堯」の読み方、古文書収集家としての件等を補足した。)
 - ・平成 23(2011)年 7 月 20 日(水)六訂稿作成
(大沼宜規編著『小中村清矩日記』、高橋 裕「明治中期の法律雑誌と大阪攻法会—梅謙次郎「日本民法和解論」に導かれて—」等を補足した。)

〔目 次〕

(お断り) 頑鉄生(後藤狂夫)「警察界に不可忘田山宗堯氏」によせて	1
1 はじめに	2
2 田山宗堯の件	3
3 警眼社の件	7
4 その他	7

(お断り) 頑鉄生(後藤狂夫)「警察界に不可忘田山宗堯氏」によせて

平成 20(2008)年 11 月 22 日(土)、『警察協会雑誌』の大正期のものを、たまたま繙いていたところ、頑鉄生「警察界に不可忘田山宗堯氏(上・下)」(上): 『警

察協会雑誌』第 308 号(大正 15 年 4 月 25 日刊)、(下):『警察協会雑誌』第 309 号(大正 15 年 5 月 25 日刊)に行き当たった。同誌については、前に何度も見ていたのに、迂闊にも、本論稿には、気付かずにいたことを、恥じる次第である。

「頑鉄生」とは、初め田山宗堯(1859~1917)の警眼社に居て、同社が刊行していた『不眠不休警察眼』(明治 25 〈1892〉年~明治 33 〈1900〉年刊行、全 188 号)の第三代編輯者であり、明治 33 年に(財)警察協会ができた後に、同協会に移って、昭和初期まで、『警察協会雑誌』(明治 33 年 6 月~昭和 23 〈1948〉年 6 月刊行、全 529 号)の編輯を担当した後藤狂夫(?~1932)¹の筆名である。ここで、後藤は、田山宗堯の生涯、人となり、功績等について、詳しく言及し、最後に、同氏が「民間人として我警察界に貢献した功績は唯一無二、吾人の決して忘るべからざる事だと思ふ。」と述べている。

この後藤狂夫の田山宗堯追悼記を読めば、本稿で縷々述べ来たったことは、ほとんどすべて意味をなさないというお粗末なことと相成った。ただ、それはそれとして、この間の検討経緯だけでも残しておきたく、取りあえず、ここに、冒頭「断り」を誌した上、平成 20 年 11 月 15 日作成の改訂稿を、それに二、三付け加えただけの二訂稿に、差し替えておくこととした。もとより、これには、上記後藤の追悼記にあることは、ほとんど踏まえていないので、田山宗堯及び警眼社については、他日、機会をとらえて、改めて考えてみたいと思う。

(平成 20 年 11 月 23 日夜誌)

1 はじめに

明治警察史検討の一つとして、当時の警察関係出版社のことを探究することも、これまた、興味深いことである²。

¹ 後藤狂夫の論稿については、「噫々新藤銀蔵君」『警察協会雑誌』第 322 号(昭和 2 年 6 月刊。新藤銀蔵 〈1859~1927〉: 大正 12 年 2 月警視庁警視で退官、以後警察協会事務員)、「末輩から見た有松先生」同第 330 号(昭和 3 年 2 月刊。有松英義: 1863~1927。警察協会、警察協会雑誌の件にも言及。),「警察雑誌の今昔」『警察思潮』第 1 巻第 6 号(昭和 3 年刊)、「感謝・感泣・感激・感奮」『警察協会雑誌』第 349 号(昭和 4 年 9 月刊)等参照。また、後藤の追悼録としては、「後藤狂夫君見舞贈呈の件」『警察協会雑誌』第 349 号(昭和 4 年 9 月刊)、「故警察協会雑誌編輯顧問後藤狂夫君追悼録」同第 381 号(昭和 7 年 5 月刊。口絵に遺影あり、松井 茂「噫、後藤狂夫君」、芽城 〈鈴木千次: 1867~1941〉「後藤狂夫君を悼む」、佐藤進 〈警察協会雑誌編輯者、?~1942〉「後藤先生の追憶」)がある。なお、本 HP 別稿「頑鉄後藤狂夫とは誰ぞ—『警察協会雑誌』検討の一として—」(HP 初載: 平成 21(2009)年 3 月 1 日初稿作成)〈<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/gantetsu.pdf>〉参照。(「なお、」以下平成 22 年 8 月 17 日追加、平成 23 年 7 月 20 日一部補正)

² 例えば、現時点で同じ試みのものとしては、本 HP 所載「内務省警視局御用御書物師須原鉄二とは誰ぞ(補正第十二次稿)—明治警察史の一齣—」(HP 初載: 初稿: 平成 19(2007)年 11

ここで取り上げる警眼社は、周知のように、戦前期では警察関係の有名な出版社³であったが、その創業者の田山宗堯に関心を持ったのは、前に(財)警察協会⁴の刊行した『警察協会雑誌』(全 529 号、第 1 号: 明治 33 (1900) 年 6 月刊~第 529 号: 昭和 23 (1948) 年 6 月刊)及びその前身ともいえる『不眠不休 警察眼』を検討したことからである⁵。この過程で、『不眠不休 警察眼』(全 177 号、第 1 号: 明治 25 (1892) 年 7 月~第 11 巻第 8(?)号: 明治 33 (1900) 年? 月刊)の発行者であって、その後、『警察協会雑誌』が刊行されるとともに、その印刷と配布を引き受けていた警眼社の社主田山宗堯のことについて、いささか知ることがあった。

以下では、田山宗堯本人及び警眼社に関して、その一端に言及しておくこととする。

2 田山宗堯の件

田山宗堯⁶(茨城県出身〈宍戸藩士、生国江戸〉、安政 6 (1859) 年 8 月 6 日~? (大正 6 (1917) 年 3 月 25 日⁷))は、明治、大正時代の出版者として著聞であるが、詳しいことについては、例えば、東京書籍商組合編『東京書籍商伝記集

月 4 日作成、補正第二次稿: 平成 20(2008)年 9 月 24 日作成、補正第十二次稿: 平成 23(2011)年 1 月 9 日作成、<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/subara.pdf>)がある(平成 23 年 7 月 20 日一部補正)。

³ 警眼社刊行の書籍については、例えば、国立国会図書館 NDL-OPA、同近代デジタルライブラリー、同サーチ <http://iss.ndl.go.jp/>、nacsis webcat 等での被検索書等を参照(平成 23 年 7 月 20 日一部補正)。

⁴ (財)警察協会について、大霞会『内務省史』第 2 巻(昭和 45 年 11 月 1 日刊。原書房覆刻本、昭和 55 年 7 月刊)669 頁参照。なお、下記(財)警察協会 HP も参照。

<http://www.disclo-koeki.org/02a/00004/index.html>

⁵ 当該誌につき、『高橋雄豺博士・田村豊氏・中原英典氏等略年譜・著作目録並びに『警察協会雑誌』資料一斑等—明治警察史雑纂 第二輯—』(平成 19 年 3 月 1 日刊、CD 版有。)、本 HP 所載「『警察協会雑誌』発行表」(平成 19 年 12 月 15 日初載、同 20 年第三次補訂稿 <http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/keikyozasshi.pdf>)各参照。

⁶ 田山宗堯の名前の読み方であるが、国立国会図書館の書誌情報では、なぜか「ムネトウ」とする。ただし、出所は不明である。(平成 22 年 9 月 15 日追加) なお、高橋 裕(1969~)「明治中期の法律雑誌と大阪攻法会—梅謙次郎「日本民法和解論」に導かれて—」『法と政治』第 62 巻第 1 号Ⅱ(平成 23 年 4 月刊〈実際の刊行は 6 月との由〉)171(770)頁、同注 18 では「むねたか」とする。(平成 23 年 7 月 20 日追加)

⁷ 改訂稿(平成 20 年 11 月 15 日作成)の段階までは、田山の逝去年月は不明であったが、平成 20 年 11 月 22 日に見た頑鉄生(後藤狂夫)の上記追悼記「警察界に不可忘田山宗堯氏(下)」により、大正 6(1917)年 3 月 25 日であることが判明した(『警察協会雑誌』第 309 号 52 頁)(平成 20 年 11 月 23 日追加)。

覧 日本書誌学大系 2』(青裳堂書店、昭和 53 年 4 月 30 日刊。大正元年 11 月刊の復刊。)136 頁に、その時点までの同氏や警眼社の記述がある。

また、高橋雄豺博士(1889~1979)『明治警察史研究 第 1 巻—明治年代の警察幹部教養—(明治十八年の警官練習所・明治三十二年の警察監獄学校・警察協会の警察官練習所—明治時代最後の幹部教養機関—)』(令文社、昭和 35 年 3 月 1 日刊)は、「警察協会の警察官練習所—明治時代最後の幹部教養機関—」中の警察協会(明治 33 (1900) 年 3 月設立)の警察官練習所(明治 42 (1902) 年 2 月開所)設立費用関連の叙述において、田山が『警察協会雑誌』出版関係(印刷、配布等)で産をなしたということを紹介している(239、240 頁)。なお、『日本警察講習新誌』第 7 号(日本警察講習会、明治 34 年 12 月 20 日刊)第 7 号 43、44 頁の「会員 不盲従生「私立警察協会ニ付テ」」は、こうした田山の活動に対する批判を展開している。このあたりは、更に検討の余地があるものと思われる。

その他には、田山についてはあまり知るところがなかったが、平成 19(2007)年の終わり頃、ある図書館で、たまたま手にした三木理史氏(1965~)『世界を見せた明治の写真帖』(ナカニシヤ出版、平成 19 年 9 月 15 日刊)⁸を見て、いささか驚いた。同書は、田山宗堯刊行の『世界写真帳』(ともゑ商会、明治 43 (1910) 年 12 月刊)その他⁹をめぐる興味深い内容のものであり、田山個人の各般のことについて、詳細に追及している。同書記載の観点からの田山宗堯検討は、極めて意味深いものがあり、多くのことを教えられた。ただ、同書は、田山と警察のつながりについては、あまり触れるところがない。

詳しいことは未だ調べていないが、田山宗堯名で出版されたものは、ネット検索の範囲では、大正 5、6(1916、1917)年頃を最後とする。他方、『警察協会雑誌』関連では、第 201 号(大正 6 (1917) 年 2 月 15 日刊)奥付には、「編輯兼発行者 後藤狂夫¹⁰、印刷者 田山宗堯(東京市日本橋区数寄屋町 1 番地)、発行所 警察協会本部、印刷所 元真社(東京市麴町区 3 番地)」とあって、田山宗堯の名前があるが、たまたま見た第 202 号は奥付が欠けていて不明であるものの、第 203 号(大正 6 年 4 月 15 日刊)では、印刷者が「金澤求也(東京市麴町区 3 番地)」

⁸ 例えば、下記「紀伊國屋 Book Web」参照。

〈<http://bookweb.kinokuniya.co.jp/guest/cgi-bin/wshosea.cgi?KEYWORD=%90%A2%8AE%82%F0%8C%A9%82%B9%82%BD%96%BE%8E%A1%82%CC%8E%CA%90%5E%92%9F>〉

⁹ 国立国会図書館所蔵〈<http://opac.ndl.go.jp/index.html>〉の田山宗堯関係書籍参照。なお、田山は、こうした書籍の刊行には、警眼社ではなく、「ともゑ商会」なる別会社を使っていた。「ともゑ商会」については、別途検討の予定でいる。なお、同書 22 頁には、田山の小照が掲載されている。

¹⁰ 後藤狂夫(?~1932)は、初め田山宗堯の警眼社で『不眠不休 警察眼』の編輯に従事していたが、その後、『警察協会雑誌』の刊行の際に協会に移ったものであるという(高橋前掲書 239 頁)。

に変わっている。

「金澤求也」とは何者かである¹¹が、例えば、ネットで引くと、高安三郎『月郊詩集』（発行人高安三郎、印刷者金澤求也、印刷所元真社）のことが出ているので、「金澤求也」は、元真社の経営者であることがわかる。ちなみに、『南満州写真大観』（満洲日日新聞社印刷部、明治44年2月刊）の著者に、「金澤求也」なる人物がおり、これも、同氏だとすると、日本や世界の写真集を多数出した田山宗堯とは深いつながりがあったものかと思われる。それが、次号の第204号（大正6年5月15日刊）まで続き、第205号（大正6年6月15日刊）から、印刷者として、「田山宗興（日本橋区数寄屋町1番地）」の名が登場する。おそらく、この時期に、田山宗堯が逝去するか、引退し¹²、一時期金澤求也が名義を肩代わりした上で、後継者と思われる田山宗興（田山宗堯との具体的な関係は不詳。¹³）が、跡を継いだのではないかと推測される。

その後、『警察協会雑誌』第224号（大正8〈1919〉年1月25日刊）奥付には、「編集兼発行者 後藤狂夫（牛込区市ヶ谷柳町25）、印刷者 田山宗興（日本橋区数寄屋町1）、発行所 警察協会本部（麹町区大手町1-1）、印刷所 三光社（本郷区真砂町36）」（第225号、第226号も同じ。）とあるが、同第227号（大正8〈1919〉年4月25日刊）奥付では、「編集兼発行者 後藤狂夫（同上）、印刷者 白土幸力（本郷区真砂町36）、発行所 警察協会本部（麹町区大手町1-1）、印刷所 日東印刷株式会社（本郷区真砂町36）」とあって、田山宗興の名が消え、「白土幸力」なるおそらく日東印刷株式会社の経営者の名前が出てくる。上記三光社と日東印刷株式会社とは、住所が同じであることから、おそらく、この時期に、三光社が日東印刷株式会社に名称変更になったものかとも思われる。

¹¹ 金沢求也につき、最近、宗像和重（1953～）「漱石と金沢求也—立花〔亮〕君が発見したこと」『図書』平成22年8月号24～27頁が公表された。同氏に関して更なる検討が期待される（平成22年8月17日追加）。

¹² 改訂稿（平成20年11月15日作成）の段階まではわからなかったが、上述のように、平成20年11月22日に見た頑鉄生（後藤狂夫）の追悼記により、田山が大正6（1917）年3月25日に逝去していることが判明した（『警察協会雑誌』第309号52頁）。（平成20年11月23日追加）。その後、朝日新聞「聞蔵Ⅱビジュアル」に、平成22（2010）年4月から、「明治、大正期朝日新聞紙面データベース（DB）」が追加された（<http://database.asahi.com/library2/>）が、これによると、「田山宗堯」で10件を検索できる。その最後の10（1917〈大正6〉.3.26東京朝日朝刊6頁）には「広告 会葬御礼」記事が掲載されており、「男田山宗信 男田山宗興」の二人の名がある（平成22年9月15日追加）。

¹³ 上記注12によれば、田山宗興は、田山宗堯の令息か。ただし、田山宗興が、後述する西島九州男（1895～1981）のいう「養子の編集長」の養子かどうかは、現時点では不明（平成22年9月15日追加）。

警眼社は、後に湯沢睦雄に引き継がれていくが、この時点は、あるいは、何らかの事情で、田山一族が同社から手を引いた時期かとも思える¹⁴。このあたり、別に詳しく検討する必要があるが、二、三言及しておく、次のことが指摘できる。

この時期の『警察協会雑誌』であるが、同誌製本の関係で、奥付がはっきり読めるものに接し得ていないので、断定はできないが、「印刷者 白土幸力」の時期は、大正 9(1920)年末頃まで続き、大正 10(1921)年 1 月 25 日刊の同誌第 247 号に、「印刷者 湯沢睦雄(日本橋区上槇町 8)、印刷所 警眼社(日本橋区上槇町 8)」が登場する¹⁵。同号巻頭掲載の松井 茂(1866~1945)「本部の一角より」や末尾の「お断り」によれば、同号より、同誌の体裁、内容が一新されたとあるので、印刷、配布等についても、なんらかの変化があったものと思われる。

この状態が、第 287 号(大正 13 年 7 月 25 日刊)まで続き、次いで、第 288 号(大正 13 年 8 月 25 日刊)で、「印刷者 渡辺一郎(小石川区西古川町 25)、印刷所 中外印刷株式会社(小石川区西古川町 25)」に変わっている¹⁶。而して、これが、第 312 号(大正 15 年 8 月 25 日刊)まで続き、第 313 号(大正 15 年 9 月 25 日刊)より、「印刷者 湯沢睦雄(日本橋区上槇町 8)、印刷所 警眼社(日本橋区上槇町 8)」が再度登場する。ただ、これら変更の経緯については、知るところがない。現時点では、第 316 号(大正 15 年 12 月 18 日刊)まで確認済であるが、大正時代は、こうした状態で、終ることとなる¹⁷。

¹⁴ 例えば、『三省堂百年史』(三省堂書店、昭和 56 年 8 月 20 日刊)163~175 頁に、「15 故亀井萬喜子刀自追悼録」より」として、「大奥様」であった亀井萬喜子刀自(?~1927、享年 73)についての関係者の思い出文が抄録されているが、その中に、「思い出の記 10」で、「旧店員 田山宗興」なる人物が、大正 10(1921)年 6 月に三省堂に入社してからの「大奥様」の思い出を記載している。これは、おそらく「警眼社の田山宗興」ではないかと思われるが、直ちには確認できない。なお、上記『故亀井萬喜子刀自追悼録』は、三省堂書店、昭和 3(1928)年 2 月刊である。

¹⁵ 例えば、警眼社(東京市日本橋区上槇町)、大正 8(1919)年 11 月 4 日刊行の国民体育会編『最新行進遊戯集』では、発行兼印刷者は遠藤 遠(東京市日本橋区上槇町)となっており、大正 8 年頃には、湯沢睦雄は、まだ警眼社の社長ではないものかと思われる。なお、HP「ぼくの近代建築コレクション」中の昭和 61(1986)年 1 月 12 日撮影の日本橋 3-4「警眼社ビル」とは何か、興味あるところである。おそらく、上記日本橋区上槇町の警眼社の最後あたりの時期のビルかと思われる。(HP「ぼくの近代建築コレクション」：

<http://blog.goo.ne.jp/ryuw-1/e/511dcca230dc9801c8ff19ac4e0c58fd>)(平成 23 年 7 月 20 日一部補正)

¹⁶ 頑鉄生(後藤狂夫)の追悼記によれば、「彼の 大正 12(1923)年の大震火災に警眼社は跡方もなく焼失せた・・・」(『警察協会雑誌』第 308 号 57 頁)とあるので、これと何らかの関係があるのかもわからない。

¹⁷ その後については、未検討であるが、例えば、第 413 号(昭和 9 年 12 月 20 日刊)は、上記と同じく、「湯沢睦雄、警眼社」とある。

3 警眼社の件

次に、警眼社関係で気付いたのは、高橋雄豺博士「大正末期の協会雑誌」『警察協会雑誌』第 500 号(昭和 17 年 1 月刊)である。同論稿には、田山宗堯から警眼社を引き継いだという湯沢睦雄の件が出ているが、大正末期でも、こうした雑誌の刊行業務(印刷、配布)に関与することには、かなりの意味があることが記載されている(22、23 頁)。『警察協会雑誌』を丹念に調べてみれば、更にいろいろ面白いものが出てくるものかと思われる。なお、警眼社の代表者名義の変遷については、前掲三木理史氏『世界を見せた明治の写真帖』146 頁参照。

ちなみに、今、ネットで、「警眼社」を一、二検索すると、警眼社ビル(上記註 15 参照。)、上記湯沢睦雄の女婿であった前田芳雄の件、警眼社の社員だった西島九州男(1895~1981)の件等が出ている。以下、これらの内の一部を紹介しておく。

前田芳雄が社長であった警眼社は、戦時中の昭和 17(1942)年 11 月に、企業整備令による同業 14 社の統合設立で、日本加除出版株式会社¹⁸となっており、戦後、前田は、昭和 31(1956)年 2 月から同 39(1964)年 2 月まで、同社の社長になっている¹⁹。

また、校正の仕事で著名な人物であった西島九州男(1895~1981)は、大正 7(1918)年に武者小路実篤(1885~1976)の「新しき村」建設に参加するが、その前、大正 5(1916)年に上京して、当時日本橋区(現中央区)の呉服橋の側にあった警眼社に入社し、出版の仕事をはじめたとのことで、警眼社社内のこと、田山宗堯及びその「養子の編集長」(田山宗興かどうかは不明。)のこと等に言及している²⁰。

いずれにせよ、田山宗堯及び警眼社については、なお今後の課題であるといえる。

4 その他

① 田山宗堯は、相当な古文書収集家であったようである。田良島 哲(1959~)「郵

¹⁸ 日本加除出版株式会社 HP <<https://www.kajo.co.jp/modules/tinyd7/>> 参照。

¹⁹ 上記 HP にも掲載されているが、『随想(日本加除出版創立 35 周年記念)』(日本加除出版、昭和 52 年 4 月 2 日刊)291 頁以下参照。なお、同社には、『日本加除出版創立三十年誌』(昭和 48 年刊)があるというが、未見。

²⁰ 西島九州男『校正夜話』(日本エディタースクール出版部、昭和 57 年 11 月 10 日刊)41~44、191(編集後記)頁参照。これは、HP「Hatena Diary 雑記帳 2007-06-07 校正者・西島九州男(1895~1981)のこと」<<http://d.hatena.ne.jp/T-kozou/20070607/1181219338>> にも、一部記載されている。

政資料館所蔵の中世東大寺文書と往来軸」『郵政資料館研究紀要』創刊号(平成22年3月刊)157~161頁(平成22年9月15日追加、平成23年7月20日一部補正)〈http://www.japanpost.jp/teipark/display/pdf/research_01_12.pdf〉

② 大沼宜規(1971~)編著『小中村清矩日記』(汲古書院、平成22年7月15日刊)356頁上段、359頁下段(明治22年9月18日、10月10、11日)に、大阪攻法会々主田山宗堯が小中村清矩(1821~1895)に『税法雑誌』への寄稿を求めたこと記載されている。〈<http://www.kyuko.asia/book/b68286.html>〉(平成23年7月20日追加)

③ 高橋 裕(1969~)「明治中期の法律雑誌と大阪攻法会—梅謙次郎「日本民法和解論」に導かれて—」『法と政治』第62巻第1号Ⅱ(平成23年4月刊〈実際の刊行は6月との由〉)157~195(784~746)頁は、大阪攻法会会主田山宗堯についても詳細に論じている。高橋先生の御示教に深甚の謝意を表する次第である。〈<http://nobiweb.jp.land.to/jurist.html>〉(平成23年7月20日追加)

(以上)